

# しなやかさの魅力

神戸芸術工科大学教授

三木善彦



## ◆キャンベルとクレイン

アメリカ映画「ザ・スタンド」を観ました。

ショーン・コネリーが演ずる主人公はすこぶる元気な、年離れた植物学者キャンベル。アマゾンのジャングルの中で癌の特効薬の研究を続けている。そこへ若い女性の科学者クレインが助手として送り込まれた。いくら説得しても、彼は頑として応じず「私が要求した人物ではない」といって彼女を拒否する。研究一途の彼に愛想を尽かして妻が去っていったという過去があり、特に現代文明に毒された女性に対する不信感が強い。さらに、研究に関しても徹底的な秘密主義を貫く。

「じゃあ、あなたへの資金援助をストップするように財団に報告するから」とおどされて、彼はやむなく助手として研究にタッチすることに同意する。

しかし、実験したり資料を分析したり、四十mもの高い樹上での植物採集にも積極的に活躍するクレインを見て、キャンベルは先入観を改め、彼女の有能さを認めていく。彼女もまたキャンベルの人間的な魅力に引かれていく。

後は、映画を観てのお楽しみ！

## ◆老いにもろいタイプ

ところで、精神科医の浜田晋先生は『老いを生きる意味』（岩波書店）で、老いにもろいタイプとして次の十項目をあげています。

- ①プライドの高い人
- ②自己中心的・独善的で、他人の話に耳を貸さない人
- ③過去の栄光にいつまでもこだわり、現実を受け入れない人
- ④孤独の士
- ⑤硬い人
- ⑥人間不信の人
- ⑦完全主義者
- ⑧身体や頭を働かすことを嫌う人
- ⑨

依存傾向の強い人 ⑩ 退くことを知らぬ人

これらの人は引退したり、病気になったり、身体が不自由になったり、挫折体験をすると、急速に老け込み、呆けてしまう危険性があると  
いうことです。周囲の人を思い浮かべてみれば  
思い当たる節もありましょう。

#### ◆キャンベルの場合

彼はプライドが高く、自己中心的で、他人の  
話に耳を貸さず、孤独で、硬く、人間不信が強  
く、退くことを知らぬ人であった。浜田先生の  
説では早晚彼はポッキリ折れ、老け込んでしま  
うタイプでした。

しかし、キャンベルが老け込まなかったのは、  
自分に不利な報告をされては研究が続けられな  
いという現実を認識してクレインを受け入れ、  
研究上でも独善的にならず、はるかに年下であ  
っても、彼女の有能さに敬意を払い、その助言  
に耳を傾けるという謙虚さと柔軟さがあったお  
かげでしょう。もちろん、目の前の病人の命を

救うためには、長年の研究成果を犠牲にしても  
よいという、人間性豊かな、ある意味では硬い  
価値観は捨てませんでした。

#### ◆適度な硬さと柔らかさ——しなやかさ

生け花で老木をたわめるとき、よほど注意深  
くしないと硬くて折れてしまいます。若い木は  
柔らかすぎて、すぐ戻ってしまつて形になりま  
せん（と、お花の心得のある妻が教えてくれま  
した）。適度の硬さと柔らかさ——それを「し  
なやかさ」というのでしよう——、それがあつ  
てはじめて形が整い、思い通りの花が生けられ  
るのです。

中高齢の人も適度な硬さと柔らかさがあつて  
はじめて、創造的な人生を開いていけるのでは  
ないでしょうか。それがまた、若い人を引きつ  
ける中高齢の魅力となるでしょう。豊かな人生  
経験に裏打ちされた知識と技術と価値観、その  
上に若い人の感性や思考から学ぶ柔軟さをもつ  
た、しなやかな中高齢に！

# 池上吉彦 湯の里分校の内観者たち(20)

内観というのは、オールマイティではありません。湯の里分校では、処罰と退学のない学校を目指して、第一に「わかる授業」に取り組みました。中学時代受験教育の埒外に置かれていた生徒の目が、「先生私にも数学がわかります」と輝きます。第二に「楽しい行事」づくりをしています。地域のお祭りのメイン行事の『天月舞』を職員生徒全員で、父母住民の指導を受けながら、農業文化祭で運動場狭しときらびやかに披露し、隣県からまでカメラを抱えた見物衆がみえるようなデモンストレーションもしています。そして「心の教育」としての内観です。でも、内観を受ける場合、えてして問題行動の対応になってしまいます。つまり処罰として行うという印象を免れ得ません。そこに難しさがあります。

M 輔は、盗みや家出が縁で内観を勧められました。彼は拒否しました。内観するくらいなら退学したほうが良いと言い切り



ました。その後説得に努め、内観が始まりましたが、動機づけの不備はまったく投げやりな内観報告を生みました。三日目に家に逃げ帰ったM輔は、父親に苦しさ、ひどさを大袈裟に訴えたため、息子を牢屋のようなところに入れてけしからんと怒鳴り込まれることとなります。

I先生の懇切な説明にやっと納得した父親は、息子に内観を継続するように説きM輔は落ち着いて内観する気になりました。継母に対する憎しみは、亡き母を慕う気持ちの裏返しで、父親に対する反発もそこにあり、家出も盗みもそのことの表現でした。内観によって父親へのわだかまりは解けたものの、継母に関しては融けたくない気持ちが強く、内観にならないまま経過しました。

それでも、その後、表面的にはこれという問題もなく卒業にこぎつけましたが、二十歳を過ぎて少年刑務所に入っているという噂が流れました。I先生には、継母に対する内観の深め不足が思われてなりませんでした。

(筆者は高校教諭)

